北京通信

大高玄殿參觀記

北京景山一劃の西に、道路を隔てゝ、赤壁圍ひの大きな一劃がある。壁が高くて外側からは、その如何なものであるか殆んど窺はれないが、これが大高殿。元來道教や五行の神樣をごた〳〵祀つたところだが、今の主神は水神樣だ。一歩中に足を入れると何のためにこんな大きな建物を造つたのかと一寸訝からずにをれない程のものだが、女ひでりならぬ（とはいふものゝ實はこの邊女ひでりもひどい）雨ひでりのこの邊では、雨の神樣は一入大事だつたものに違ひない。

この建物は明確に明代のものだといふが、どういふものか昔からあまり注意されてゐなくて、朱偰の「北京宮闕圖說」の中にも、古來本殿に關する記錄は稀少だといふことを言つてゐる。寫眞なども、本殿を撮影したものは今以て殆んど見當らないとは小野君の話である。現在は建物の主部が故宮文獻館分處に利用されてゐて、軍機處當案の一部が存置されてゐる。一般には開放してゐない。さきつ秋晴れの一日例によつて小野君と一緒に、文獻館諸士の特別な好意で以て、この一劃をくまなく見せて貰つた次第である。見せて貰つたその上に、文獻館曹宗儒君に大高玄殿記一部を作つて貰つた。同君の好意を謝し、これを謄案して以て僕達の參觀記とする（一四、一一、二六今西記）

大高玄殿

一、大高玄殿の過去

大高玄殿は景山の西南、紫禁城の西北に位し、南は筩子河卽ち紫禁城の護城河に臨み、北は雪池卽ち明代の裏冰窖に至つてゐる。東南に鴛鴦橋なる橋がある。西側は今、大石作、小石作と稱する兩胡同だが、これは明代大高殿建築當時の石工所だつた名殘りを留めるものである。大高玄殿、俗に祇大高殿と稱し、「淸皇城宮殿衙署圖」（この圖については今西・乾隆北京全圖に就いて參照）已に大高殿とのみ記してゐる。

殿は明の世宗嘉靖二十一年の創建になる（明史世宗紀）。同二十六年十一月災に遇ひ（明史楊爵傳）また修覆した。其の建制は劉若愚の酌中志に

『大高玄殿、その前門扁額を「始青道境」と曰ふ。左右に牌坊二あり。左なるは「先天明鏡」、「太極仙林」の、右なるは「孔綏皇祈」、「宏祐天明」の扁額を夫々に掲げてゐる。又二閣あり、左なるを晃明閣、右なるを灝靈軒といふ、內に福靜門、康生門、大高玄門、蒼生門あり、殿の東北の閣を無上閣といひ、閣の下層は龍章鳳篆と名付ける。又始陽齋、象一宮の二殿あり。象一宮內に供ふる所、高さ一尺許りの金屬製一帝君像は乃ち嘉靖帝の御容である」とある。（今西曰く、この酌中志の記事は原文に就いて見られ度い。自分は右の如く讀む可きものと考へないが、曹君はかく讀まねばならぬといふから、曹君の說くが儘に書いておいた。）

淸初皇城宮殿衙署面に描く所は、劉若愚の記す所とやゝ異つてゐる。門前の牌樓は二。閣は二。門は三個所。每一個所三門。前殿の前に小室があり、又牌坊一個がある。旗杆二。左右各々に配殿あり。後殿あつてその左右にも亦殿を配してゐる。最後に亭あり、亭前東西に亦配殿兩個。亭の左右には各三間の殿がある。

乾隆北京圖描くところは又前兩說と異

つてゐる。門前の牌樓は三。閣二。門は三個所にあり每一個所三門。第三門の正門が大高玄門で左が蒼精門、右が黃華門である。門を入ると左右に鐘樓鼓樓がある。中央に大高玄殿あり、その左に闡玄殿右に演奥殿がある。大高玄殿の後に九天萬法一炁雷壇と稱する建物があり、その左には天乙之殿、右には涌明之殿なるものがある。又後庭に亭一個がある。左は伏魔殿右は北極殿である。則ち乾隆時には已に、始青道境、福靜門、康生門、無上閣、龍章鳳篆、始陽齋、象一宮等諸名の建造物は見當らないわけである。

日下舊聞考四一に「大高玄殿は雍正八年に修め……又乾隆十一年に修めた。」宸垣識略に「大高玄殿は神武門の西北にあり、明の嘉靖中に建てたものである。本朝雍正乾隆の兩次重修。今上御書の扁聯がある。外に下石馬石牌二個があり、門前に又二亭があるが、亭は鈎簷闕角、人巧を極めたものである。明時中官呼んで九樑十八柱としたが、今に尙存してゐる。」嘉慶一統志に「嘉慶二十八年大高殿を重修した」と。大高殿に關する諸家の記錄概ね如斯く、酌中志記るすところは前述の如くである。而して皇城宮殿衙署圖中に描くところの大高殿は注して「大高殿」とあるほか、別に隻字記入するところがない。この圖に就いては自分はかつて考證して雍正初年製するところのものであるとした。（今西・乾隆北京全圖に就いて參照）而して舊聞考に雍正八年大高殿を重修したと見えるから、この圖に描くところのものは正しく明代の舊觀たる疑を容れない。

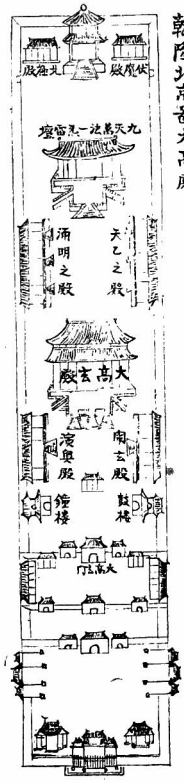
清初皇城宮殿衙署圖大高殿

乾隆北京圖中描くところの門前牌樓は三個あるが、これは南面に更に一牌樓が增えてゐるのである。そして皇城宮殿衙署圖にある大高玄門の牌樓は、乾隆圖には已に見當らない。これ或は門內の牌樓を以て門前に移建したものではあるまいか。一大疑問である。又後庭の亭前東西兩殿と乾隆圖中になく、たゞ左右南向の兩殿のみを殘してゐる。この大高玄殿の牌樓及び配殿の變動は正しく雍正八年以後、乾隆十一年以前にある可きである。今は亭左右の兩殿、卽ち乾隆圖中の伏魔殿、北極殿も亦痕跡を留めない。これ亦正に嘉慶二十八年重修の際拆去したものであらう。現在、故宮內務府の檔案を整理中なので、將來或はこれ等のことに關する史料が見當ることがあるかも

知れない。

二、大高玄殿の現在

門前の牌樓はもと木質のものだつたが、今改めてコンクリート造りにした。但し制は舊の如く、たゞ若干高さを加へただけである。東面牌樓の石額に、東向きのものに「孔綏皇祚」、西向きのものに「先天明境」とある。西面牌樓の石額に、東向きのものに、「太極僊林」、西向きのものに「孔佑天民」とある。南面牌樓の石額に、南向きのものに、「乾元資始」、北向きのものに「大德曰生」とある。南面牌樓は乾隆の時に至つて始めて出來たものであるから、扁額の文義も字體も（乾隆の御筆である）已に東西兩牌樓のものと同樣でない。蓋し明の嘉靖帝は道教を好んだ。故に太極僊林、先天明鏡等の字を以て之に題した。清朝では大高殿を以て、祈雨、祈晴、祈雪のところとした（內務府檔）。故に乾元資始、大德曰生などゝ書いた。其の義は時を以て晴れ、時を以て雨し、雪して民は始めて生きることが出來るの意味である。民國十九年に、南の牌樓は今に圮れんばかりの有樣になつたので、一旦これを取り拂つたが、二十七年又重建した。扁額は昔の物を其儘使用してある。其の間二十五年には東西兩牌樓に改修の手を入れてゐる。朱傑先生の北京故宮圖說中に「大高玄殿の前、紫禁城護城河に臨んで、もと一牌坊あり、



は前後共に戟柱があるが、たゞこの大高殿の牌樓に限つてこれがない。これは一特點である。

左方の二亭は明の炅明閣、湖靈軒である（酌中志）。清にはこれを音樂亭といつた（內務府檔案）。光緒庚子後、光緒二十九年の頃、燬たれたがまた修復した。故宮博物院文獻館に當時の木廠修工所で描いた亭の圖、及び樑架圖を所藏してゐる。

或は云ふ、この亭の建築と紫禁城の角樓の制とは同じだと。其の重簷は三層、第一層四角、第二層十二角、第三層十二角、合せて二十八角、自分は建築學者でないからよく知らないが、自分の目で見たところでは、どの角にも差別はない。

第一處の門三。中門は石欄を以て圍ひ、東西に各々隨墻門がある。東の隨墻門は今故宮文獻館の出入口になつてゐる。門內に橫へてある大木は以前牌樓に用ひてあつたものである。第二處の門も亦三。中門も亦繞らすに石欄を以てしてある。

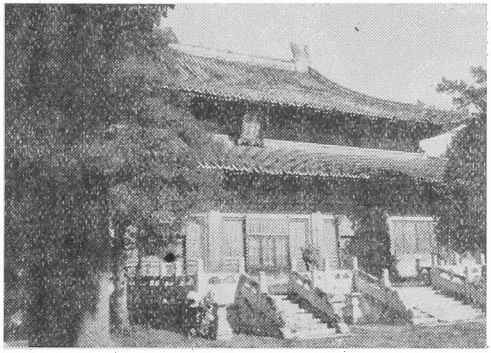
坊礎猶存す。酌中志に據るに榜を始青道鏡といふと」。已に逊ぶるが如く南面の牌樓は明代にあるところではない。卽ち朱君は明代前門の扁を誤つて牌樓の額としたのであるが、思ふに朱君の見たところは當に民國十九年以後、二十七年以前のことであつて、よくも考へなかつたものであらう。

尙こゝに附言しておくと、北京の牌樓

東西に小門一つ宛があつて、こゝから入る。小門を入つたところに昔の値房があり、今故宮職員の宿舍になつてゐる。院中東西に各井戸一つがある。第三處の門も亦三。正門は卽ち大高玄門で、前二所の正門より立派である。大高玄門の玄字は元字に作られてゐる。この正門と東門とは常時は開かず。西門から出入する、內は蒼松、翠栢、氣象森古たるを覺える。東西に鐘鼓樓各一、又旗杆各一。東西の配殿は五間、卽ち舊時の鬧玄殿と演奧殿とである。民國十九年に拆去した牌樓の造木類は東配殿の廊下に今も積み殘してある。正面中央は卽ち大高玄殿。重簷、五間。繞らすに石欄を以てし殿基は高さ四尺に及ぶ。其の前の石陛には刻むに龍鳳雙鶴を以てしてある。皇城宮殿衙署圖描くところの殿前小室及び鐘鼓樓間の牌樓共に今は等ねて跡方もない。

大高玄殿の眞後は九天應元雷壇である。乾隆北京圖には注して九天萬法一炁雷壇となつてゐる。壇殿の制はやゝ大高殿に遜る。單簷、五間。亦石欄を以て圍つてある。石陛には五羽の鶴を刻し、雲氣を圖して特異の圖柄を見せてゐる。東西の配殿は各々九間。卽ち乾隆北京圖の天乙之殿と涌明之殿とである。

最後に北側の宮墻前、九天壇の後方に位置して魏立するものは、卽ち昔の無上閣、今の乾元閣、坤貞宇である。朱君の北京宮闕圖說に、猶明代の始陽齋、象一宮を記るしてゐるがこれは誤りである。思ふに淸代已にこの名は見えてゐない。今又これに當る殿もない。昔時左にあつたものは伏魔殿、右にあつたものは北極殿である。

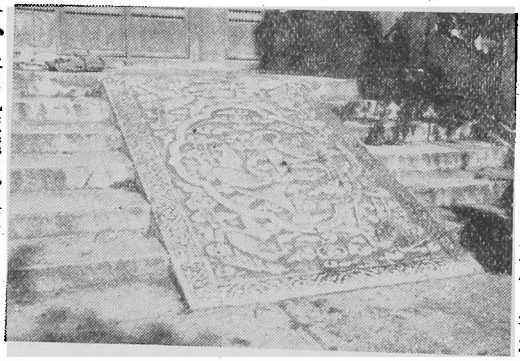


三、大高玄殿の各殿內部及び其建制

大高玄殿といふのは總名である。宮中の外東路を呼んで寧壽宮といふが如きものである。その大高玄殿の規模に就いては既に上述の如く、重簷五間、圍むに石欄を以てしたものであるが、石欄の石刻にも亦頗る注目すべきものがある。陛は三出、石級は凡て八段。中陛石欄の柱頂、前の者には左右共に鳳を刻し、後の者には又左右共に龍が刻してある。左階の石欄柱には皆龍を、又右階のそれには左側のものに龍を右側のものに鳳を刻してゐる。其他の石欄に刻するものは皆鶴である。或は立ち、或は飛ぶ。殿前に鐵の八卦鑪二つを置く、殿頂は黃瓦を以てし、窗欞は皆花錦式に作る。殿內正面中央に月台が置かれてゐる。木製。陛は前出四級。欄杆を以て圍んである。中に案を置き、案上更に龕を置く。龕の後に木牌があつて、表に「玉皇大帝上天尊」等の字が刻まれてゐる。元來龕內にあつたものを外に持ち出したものらしい。これは水の神である。龕の製作は甚だ精細である。兩旁に銅像四個がある。人はともに道敎

の裝。牛に乘るもの二人。手には「壽」の字を捧げてゐる。鹿に乘るもの二人、手には「福」の字を捧げてゐる。但し後の二人乘るところのものが鹿であるかどうかは未だ斷定し難い。しばらく鹿に似たものとしておかう。其他に尙木牌五つがある。牌上の文字に曰く、中央土德星君之位、東方木德星君之位、西方金德星君之位、南方火德星君之位。北方水德星君之位。有の臺の後に又三個の臺がある。何れも前臺よりせいは高いが造りはやゝ小さい。中央の臺の案上に神牌があつて、上清靈寶大尊之神位と見え、東臺は玉清元始天尊之神位、西臺は太清道德天尊之神位である。正臺の東西に須彌座の遺址がある。殿內東西兩墻の前に高い龕がある。當初皆然る可き像があつたものであらうが今は何も殘らない。殿內東北閣に鐘龕、西北角に鼓龕があるが、今は鼓だけ殘つて鐘の行方は分らない。殿の天花板は藍色地に金圓龍を描く、天井中央に藻井あり、大圓龍が刻されてゐる。滿飾金色、工は極めて精細である。

兩旁の配殿は皆緣瓦を以て葺かれてゐる。天花板は雲霞模樣、壁は紅色。雷壇は五間、石欄の柱頂には皆鶴が刻まれてゐる。殿上の瓦は中緣色で、周圍は黃色、殿內北よりに須彌座三つがある。こゝに三清神牌の祀られてゐることは略々前殿と同じ。中央須彌座の前に一個の案があつて、上に九天應元雷聲普化天尊なる神牌一個、斗母娘々なる神牌一個がおかれてゐる。この案の東西にも亦夫々一個宛の須彌座があるが、現在は空席何もない。天花板は彩雲雙鳳、素地は藍色、藻井が又甚だ大きい。二層に分れ上に雲龍を下に雲鶴を刻した奇異なもので、そしてこれらのものが西北の半分は赭黑色に、東西の半分は黃金色に色どられてゐる。夫々陰陽を象どつたものである。



無上閣は舊名で清朝時代には已に無い。亭は兩層。上層は乾元閣といひ瓦は藍色である。門窗、欄杆などは皆弧形を集めて眞圓になる樣な形に造られてゐる。これは天圓卽ち天を象どるの意である。下層は坤貞宇といふ。瓦は黃色、たて方は正方形、これは所謂地方、地の方なるを象どつたものである。今扉を開けることが出來ないので、隙間からうちを窺ふに、龕あつて坤貞后土之神位なる神牌が見える。天花板亦圓金龍式。後方暗處に梯子が見えるのは上の乾元閣に通ずるものである。建物の前の石陛には龍鶴雙鳳が刻まれてゐる。この亭の前方並びに左右兩方にあつたといふ建物は今何れも痕跡を殘さない。さればこの邊りは明代の古景とは言ひ得ないわけである。

大高殿圖は夫々清初皇城宮殿衙署圖及び乾隆北京圖から採つて摸寫したもの。趙亦雲女子の手を煩はした。記して謝意を表する。